

白川静のことば
《45》



金子都美絵・画

枉死者や枯槁の残骨は呪霊となり怨霊となったが、陵墓玄室の奥深く鄭重に収められた埋葬者には、地上の生活がそこに再現され復活の機会を待つ。文献に伝えられる玉衣の人も近時は姿をみせ、馬王堆のような生体に近い埋葬者も発掘されている。そのようにして五体を保つのは、復活のためである。

すでにそのような復活の思想があるとすれば、死者の霊はその間どこに赴いているのであろう。それはどこかに、次の宿るべき新たな肉体を求めて、しばらくその姿をかえ、機会をうかがっているはずである。わが国では、死者の霊は、近くの山や森に住む鳥になると考えられた。

古に變ふる鳥かもゆづる葉のみ井の上より鳴き渡りゆく

〔万葉〕二・一一一

のように、鳥は「古に變ふる鳥」である。中国でも霊は鳥と化していたのではないかと思う。文字の上では雁・雥のように神聖の場所に雀すずめがそえられている。

《漢字の世界―2》平凡社ライブラリー P287～288

